

### 1.はじめに

弊社のある大崎町は鹿児島県の大隅半島に位置し、年間平均気温17度前後で冬でも温暖な気候であるため、冬野菜の一大産地になっています。

農林水産庁の統計データによると、鹿児島県では約2000haの大根の作付が行われています、そのうち4割ほどが青果用ダイコンとして生産され、主に関西～中京方面に出荷されています。

大隅半島では、ダイコンだけで1法人あたり30ha以上栽培している法人が10数社あるなど、近年農業法人の大型化が進んでいます。

大崎町は、年が明けると朝の最低気温が氷点下になる日が10日ほどあります。2016年1月は3～4年に一度の積雪があり、その後の寒波の入りにより観測史上最低値に匹敵するマイナス6.4度(大崎町の西側に位置する鹿屋市ではマイナス8度!)を記録しました。霜が特にひどいエリアでは、収穫前のダイコンが凍ったまま戻らないなどの被害も発生し、2015年12月のスーパー暖冬からの過去最低気温という厳しい年からでした。

弊社では近年「春宴」を本格導入しましたが、そのような厳しい環境の中でも比較的育てやすいと感じています。「春宴」の栽培は、1月のトンネル栽培、1月末からのパオパオ(べたがけマルチ)栽培を中心に行っています。



▲写真2 4条の大型トンネル栽培

### 2.「春宴」のトンネル栽培

2016年のトンネル栽培は、12月28日から1月25日にかけて数回播種しました。

この時期のトンネル栽培は、抽苔が起りやすいことで知られています。また、春先の気温の上昇に伴いトンネル内が蒸し込むと、地上部が過繁茂となり根部の肥大不足へつながる可能性があるため、トンネルの裾を細目に開け換気するなど、徹底した管理が求められます。

地上部が過繁茂して他品種の根部がばらつく中、「春宴」は形状が良く揃い、曲りが少なく一番安定していました。そして肌つやもよく、洗い上がりが非常に綺麗で、青果にはもってこいの品種でした。また、圃場歩留りも安定していて、今年は650～700ケースを出荷することができました。



▲写真1 「春宴」の根部

### 3.「春宴」のパオパオ栽培

2016年のパオパオ栽培は、1月25日から2月5日にかけて数回播種しました。

この作型は、発芽が悪く短根になりやすいため非常に難しい栽培方法です。パオパオの使用により発芽率の改善、生長の促進が期待できますが、あまり長く使用すると根の肥大が遅れるため、パオパオを外すタイミングには気を使っています。

今シーズンのパオパオ栽培での「春宴」は、圃場により短根気味なものも見られましたが品質はおおむね良いと思いましたが、さらに、ダイコンの価格が高値で推移したため、高収益を得ることができました。

また、2月10日～25日播種で「春宴」マルチ栽培も行いました。その結果、根の長さも十分に取れ抽苔も遅く、今後も安定品種として使用していきたいと考えています。



▲写真3 葉が旺盛になっても品質の良い「春宴」



▲写真4 ダイコンの出荷調整



▲写真5 ダイコンの出荷調整



▲写真6 ダイコンの機械収穫



▲写真7 ダイコンの機械収穫

#### 4. おわりに

弊社では、来年度は80ha以上の面積でダイコンを栽培する予定です。しかしながら、鹿児島県では特に秋の温暖化と4月・5月の豪雨が顕著になっており、ダイコン生産にとっては厳しい気候条件へなりつつあります。そのような中、「春宴」の優れた品種特性は安定生産を大いにサポートしてくれていると感じています。

これからも、お取引させていただいているお客様に品質の良いダイコンを届けられるよう頑張っていきたいと思います。雪印さんにはさらなる品種の開発を期待しています。

来期は10月20日前後の「春宴」秋播きも随時検討していく予定です。



▲写真8 従業員一同  
(前列左から、取締役農場長 佐藤和彦氏、代表取締役 山下義仁氏、専務取締役 中山清隆氏)